



Title	漱石の文学理論 : 文学者の営みという観点から見た その基礎と道德観
Author(s)	濱田, 洋輔
Citation	言語文化研究. 2023, 49, p. 115-130
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90948
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

漱石の文学理論：

文学者の営みという観点から見たその基礎と道德観

濱 田 洋 輔

Soseki's Theory of Literature: Its Foundation and Views on Morality in Terms of Literary Writing

HAMADA Yosuke

The theory of literature propounded by Soseki Natsume, one of Japan's most renowned novelists, occupies a unique place in the history of Japanese aesthetics. This study attempts to (i) explain the foundation of this unique theory of literature and (ii) explicate its relation to moral issues, especially regarding literary writing. Soseki's main ideas in this regard can be thusly summed up: consciousness exists as a continuous flow of sensations or impressions. The content and order of a conscious flow can to some extent be selected. Along with this selectivity, ideals of consciousness (or life) emerge; one such ideal is that of a literary person, which mainly aims to evoke emotions. This ideal is in turn split into different literary ideals and authors of novels in the new era following the Meiji Restoration—when they include moral elements in their works—should seek to harmonize two of these ideals, that is, naturalism and romanticism, which represent two opposing moral positions.

キーワード：夏目漱石，文学理論，道德

序

夏目漱石という人口に膾炙した名は、日本の歴史においてまずもって小説家として記憶されている。それも当然なこと、漱石の才能が最も集中的に投入されたのは、また、彼の才能が最もいかに発揮されたのは、様々な文筆分野の中でも小説分野であったということは自他共に認めるところであろう。しかし良く知られているように、漱石は小説だけを残した訳ではない。随筆も残した。決して趣味で嗜むなどとは呼べない程度に俳句を詠んだ。やはり趣味の域を超えた漢詩も作った。文学研究者として（主に英米文学についての）少なからぬ評論も書いた。それらに加えて、哲学的な文学理論も構築した。——漱石の携わったそうした幾つもの文

筆分野の中で、ここで取り上げたいのはこの最後に挙げた哲学的文学理論である。

これは漱石について語られる際、減多に言及されることのないことのように思われるが、漱石は日本の美学者（文学理論家）としても特筆すべき存在であると言って良い。少なくとも漱石の美学＝文学理論は、中でも特に、（その根幹において）既存の誰かの美学に依拠していないという独創性¹⁾、哲学的・科学的基礎付け作業、および、その緻密で分析的な体系性という点において、明治以降の、どこか有史以来の日本の美学史に異彩を放っていると言って間違いないように思われる²⁾。

確かに漱石自身は、自身の美学・文学理論上の主著である『文学論』（1907）は未完の作であり、しかも、「失敗の亡骸……しかも畸形児の亡骸……あるいは立派に建設されないうちに地震で倒された未成市街の廢墟のやうなもの」（漱石 16: 596）³⁾であると公言している。しかし、たとえ漱石の言う通り『文学論』がこうした比喻に値する未完の失敗作であると認めるにしても、『文学論』が稀有の独創性と精緻な体系性を有しているということに変わりはない（独創的かつ体系的なものが必ずしも成功するとは限らないであろう）。

ここまでの簡単な記述が——少なくとも大方——正しいとすれば、漱石の文学理論は日本の美学史上特異かつ重要な位置を占めているということになるが、にもかかわらず、漱石文学理論（漱石美学）研究は漱石文学研究に比べると僅少であるとさえ言うて良いであろう⁴⁾。そうした事情・研究状況にあって本稿の主眼は、諸著作に通底する漱石文学理論の基礎を、特に文学者の営みという観点から根本的かつ纏まった形で簡潔に描出することにある。加えてまた、同じ観点を中心に、その文学理論の基礎と漱石の道德観との関係をやはり根本的かつ簡潔な形で阐明することにある⁵⁾。と、本稿の主眼は以上二点であるが、その二点が漱石文学（作品）を理解

1) 後に触れる様に、漱石の文学理論は、アメリカのウィリアム・ジェイムズ、フランスのテオドール・リボーなどといった西洋の哲学者・心理学者の理論をその基礎付け作業の為に利用している。しかしそれは、洋の東西を問わず誰かの美学を基盤としている訳ではない。

2) 例えば、漱石の『文学論』より少し前に発表された坪内逍遙の『小説神髓』（1885-1886）も体系的かつ独創的な文芸理論と言えるであろう。しかし漱石の『文学論』の構造・議論の方が——その良し悪しはここでは措くとして——体系的かつ分析的であることに異を唱える人はいないのではないかとと思われる。また『文学論』が『小説神髓』よりも独創的であることは、少なくとも次の一点においては明白と言えよう。つまり、『小説神髓』が当時の日本美術界・美学界に強い影響力を有していたアメリカの美術史家・哲学者アーネスト・フェノロサの論などを頼りに「美術とはなにか」という美学上の常套問題から出立しているのに対して、漱石の『文学論』が、西洋の哲学者・心理学者を頼りに「意識とは何か」という遥かに根本的な問題に取り組むことから始めているという点においてはである（『小説神髓』に関しては坪内 2010: 15-26, 222-223, 『文学論』の独創性については小宮 1949: 372を参照）。これに関して、亀井も大枠では似たような見解を示している。彼は『小説神髓』を「基本的に当時の文壇相手に新しい小説作法の主張をしたものであって、文学の本質論とはなっていないように」（亀井 2011: 164）思われると評する一方で、漱石の『文学論』は「近代日本全体を眺めても稀有の文学『研究』の書」とであるとみなしている（亀井（2011: 140））。

3) 漱石の著作に関する引用・参照は全て『漱石全集』（夏目金之助、『漱石全集』、岩波書店、1993-2004年）による。「漱石」の直後に続く数字は巻数を、「:」に続く数字は頁数を示す。

4) ただしこれは当然比較の話であって、漱石文学理論についての研究は少なからず存在する。詳細については例えば、佐藤 2005、小倉 2019を参照。

5) 多くの哲学者・思想家と同様、漱石の処々での言明には完璧な一貫性がある訳ではなく、文学や道德についての説明においてもやはり、種々の矛盾や齟齬といったものが見出される。であれば、漱石の様々な言説・著述を通貫する文学理論の基礎構造の描出、および、その基礎構造と漱石道德論との関係の解明を——この限られた頁内で——簡潔に行おうという本稿の試みが、無視すべきでない漱石文学理論の細部や屈折を看過し得る可能性を伴っているということは否定できない（漱石文学理論の著作間の差異・変化については例えば、伊藤 2013参照）。しかし、細部に拘り過ぎなければこそその利点、簡潔かつ全体的であればこそその長所というものも存在すると言って良いであろうと思われる。

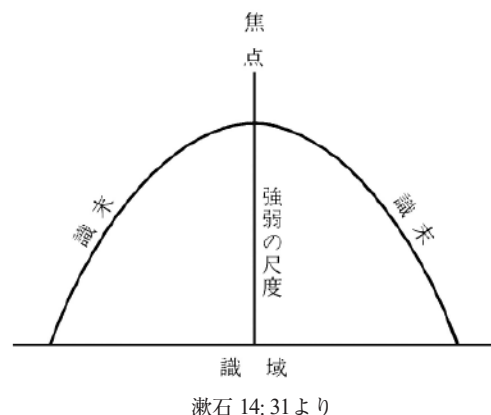
する上において重要な意義を有していることも最後に付随的に示したい。

1

まだ作家＝文学者ではなく、研究者＝英文学者であった漱石が自身の文学理論を打ち立てようと考えようになったのは、単に研究の為ではなく、まして名誉や酔狂の為でもなく、自身の切実な「煩悶」（漱石 16: 591）の為であった。大学で「文学」なるものを学び文学士という肩書を得るには得た。にもかかわらず、文学がそもそもいかなるものか分からない。文学とはいったい何であろうか。その問いを悩みの種として抱えたままロンドンに留学していた漱石は、煩悶の原因を根本から取り除くには——西洋の誰彼の理論を学ぶのではなく——自分自身の考えに立脚した「自己本位」（漱石 16: 595）の文学理解・文学解釈を獲得せねばならないという考えに至る。その結果漱石は文学作品の読解・研究を離れて哲学や科学の書物に没頭して行き、その成果として彼の文学理論上の主著となる『文学論』が生まれてくることとなる（漱石 14: 8-10; 漱石 16: 591-597）⁶⁾。

このように個人的な感情を源泉とし、「自己本位」という考えに立脚して書かれた『文学論』は、既存の西洋美学を基にしたものではない。しかし、その基礎付け作業においては、西洋の哲学者・科学者（心理学者）に負う所が少なくない。基礎付け作業とここで言うのは、そもそも人間の意識とはどのようなものであるかということの根本的な理解・説明を意味するのであるが、その作業において漱石は、（哲学者であり心理学者であった）ウィリアム・ジェイムズおよび（動物行動学者であり心理学者であった）ロイド・モーガンの意識論に頼っている⁷⁾。漱石はその論を次の様に説明している。

意識の外部（＝意識が及んでいないところ）から意識の周辺部へと入ってきた不明瞭な印象・知覚Aは、意識の焦点部分へと近付くにつれて明瞭度を高めて行き、意識の焦点においてその明瞭度は頂点に達する。その後、意識の焦点を超えた印象・知覚Aは再び意識の周辺部へと向かい、次第に明瞭度を弱めていつか意識の圏外へと退いて行く。このように一



6) 因みに漱石は、「味の素」の発明者である化学者池田菊苗とロンドンで懇意になったことが、こうした思考の変化と取組みに重要な影響を与えたと語っている（漱石 25: 282）。

7) この文脈で漱石が言及しているのはモーガンのみであるが、そのモーガンの理論は——全般的に言って漱石がモーガンより遥かに大きな影響を受けた——ジェイムズから受け継いだものである（Morgan 1903: x, 11-23）。この辺りに関しては例えば、小倉 2019 も参照。

つの波が低所→高所→低所と移るように、低（意識の周辺部）→高（意識の焦点）→低（意識の周辺部）と明瞭度の度合いを変えながら意識の圏内を過ぎ去って行く印象・知覚Aに、別の印象・知覚B, C, D, E, F……が同様な波形を描きながら続き、延々と流れて行く（漱石 14: 29-31）。

漱石にとって意識とはつまり、〈様々な印象・知覚の途切れることのない連続的な流れ〉を意味しており、こうした意識理解が漱石文学理論の基礎を成している。

そうした意識理解と並んでその文学理論の基盤となるのは、（少なくとも漱石研究者には）良く知られたF + fの理論である。これは端的に言って、Fとfという要素を同時に惹起する文章のみが文学であるとする理論であるが（漱石 14: 27-28）、ではFおよびfとはなにであろうか。

漱石は——意図してか意図せずしてか——このFとfが何という英単語の略であるのかを端的に教えてくれないが、「情緒」（漱石 14: 27）と説明されているfが英語のfeelingを意味していることに異を唱える人はないように思われる。一方「焦点的印象」（漱石 14: 27）と換言されているFの方は、『文学論』の構想に関わるノートから推すに、第一にはFocus (Focal impression/idea) を意味していると考えて良いであろう（漱石 21: 298-306）。が、「認識的要素」, 「知的要素」（漱石 14: 27）などとも換言されているFは同時にFactの意味合いも多分に含んでおり、その結果、fほどにはその意味が判然としない⁸⁾。よって幾つかの解釈が可能であろうが⁹⁾、ここでは差し当たりFocusとFactの両義を兼ね備えた意味、つまり、「意識の焦点において捉えられた事実（認識）的要素」といった程度の意味にFを解しておきたい¹⁰⁾。大雑把に言ってつまり、『文学論』の大前提となるF + fの理論によって漱石が主張するのは、「文学とは事実認識（F）と感情（f）という二要素を読者の心・意識（＝無数の印象・知覚の連続的な流れ）に同時に生ぜしめるものである」ということである。

ここではこうしたF + fの理論の詳細には立ち入らず、漱石が『文学論』において感情・情動を文学に絶対不可欠な要素であるとみなしていたということだけを確認・強調しておきたい。その上でこれからは、『文学論』の後まもなく発表された「文芸の哲学的基礎」（1907）（以下、「基礎」と省略）という（講演を基にした）著作を頼りに、これまで見てきた文学理論が文学者の営みとどのように関わってくるのかを見て行きたい。

「基礎」において漱石は先に述べた意識の波形にこそ触れていないが、『文学論』同様、次の様に議論を始めている。「とにかく意識がある。物もない、我もないかも知れないが意識^{だけ たしか}は随

8) 『漱石全集』の注解〔漱石 14: 542〕を参照。

9) 例えばある研究者はFをFactorと解釈している（佐藤 2005: 22）。

10) これに関して注意しておいて良いであろうことは、Fとは一瞬・一時といった短時間の事実認識に留まるものではないということである。例えば青年期に恋愛の虜になった人の青年期全体におけるFは恋愛に纏わる事実認識であり、壮年期に金銭欲に取りつかれた人の壮年期全体におけるFは金銭に纏わる事実認識であるといったように、Fは長期的な事実認識でもあり得る。それどころかFは、ある一時代の社会（に生きる人々）が持つ事実認識でもあり得るとさえ想定されている。例えば、維新の時代における社会全体のFには「攘夷、佐幕、勤王」などといったものがあるという（漱石 14: 31-33）。

にある。そして此意識が連続する。何故連続するかは哲学的に又は進化的に説明が付くにしても、付かぬにしても連続するのは慥であるから、^{これ}之を事実として歩を進めて行く」（漱石 16: 72）¹¹⁾。つまり「基礎」においても漱石は、「何はともあれ意識が存在し、それも連続的に流れるものとして存在する」という根本前提から出発するのである。

こうした根本前提は、「基礎」にあつては二つの相関連する重要な考えを随伴している。その一つは『文学論』に基づいて既に見たところ、つまり、「意識が連続する」とは、単に意識が延長・継続することではなく、無数の異なる（＝区別可能な）印象・知覚 A, B, C, D, E, F……が連綿と意識の中を流れて行くことを含意しているという考えである。換言すればそれは、「意識が連続する」とは区別された意識内容（印象・知覚）が順次に継起することであるという考えである（漱石 16: 75）。「ともかくも意識があり、意識は連続する」という大前提に随伴するもう一つの重要な考えは、そのように区別された様々な意識内容およびその順序は、その意識の保持者によって「ある程度」（漱石 16: 76）選択可能であり、そうした選択可能性から、どのような意識内容をどのような順序に並べようかという個々人の目標＝理想が生まれてくるという考えである。漱石はこの考えを次のように纏めている。

吾人は生きたいと云ふ傾向を有つてゐる（意識には連続的傾向があると云ふ方が明確かも知れぬが）。此傾向からして選択が出る。此選択〔可能性〕から理想が出る。すると今迄は只生きればいゝと云ふ傾向が発展して、ある特別の意義を有する命が欲しくなる。即ち如何なる順序に意識を連続させ様か、また如何なる意識の内容を選ぼうか、理想は此二つになつて〔＝理想はこの二点を考慮して〕漸々と発展する。後に御話をする文学者の理想もこゝから出て参るのであります。（漱石 16: 76-77、傍点筆者）

つまり、ともかくも意識が連続するものとして存在し、その連続にあつて意識内容およびその順序は（ある程度）選択可能だというのである。そうしてまた、その選択可能性に基づいてこそ理想というものが成立し、そこに文学者の理想というものも現れてくるというのである。以下では引き続き「基礎」に依拠しながらこの文学者の理想について見て行くことで、文学者の営為についての漱石の基礎的な考えを明らかにして行きたい。

2

今し方見たように、漱石は相区別される様々な意識内容（印象・知覚）の存在を想定していた。しかし実のところ、意識内容は初めから互いに区分されたものとして存在すると想定され

11) 漱石がここで進化の観点を持ち出しているのは、スペンサーやジェイムズ、リボーなどといった哲学者や心理学者の影響あつてのことであろう。この点に関しては島田 1982 や加茂 1984 などを参照。

ているわけではない。意識は当初は内容上の区別を知らないが、(幼児から大人への)個人の発達もしくは(人類全体の)歴史の発達に伴って、様々な意識内容が次第に区分化・細分化して行くというのである。漱石のここに関する記述は個人の発達と歴史全般の発達を一緒に扱っており、その点では不明瞭なものになっているが、その区分化の流れをごく大雑把に纏めれば以下の通りである。その初めにおいて意識内容はまず、時間(の前後)と空間(の上下左右)へと分化する。続いて時間と空間の中に物(物質的なもの)と我(自己・精神的なもの)との分化が生ずる(漱石 16: 77-85)。物は更に、自然、(自然に属するものとしての)人間、(超感覚的な物としての)神¹²⁾の三種に、また一方の我は、知、情、意の三種に分かたれる(漱石 16: 88)。

ここで最も重要なのは「我」(自己・精神的なもの)の知、情、意への分化という考えである。というのも、この分化こそがここで問題にしたい——意識の選択可能性に基づいて生じる——「文学者の理想」というものに直接関わって来るからである。この知、情、意のうちどの意識内容を優先的に選択するかということは即ち、知、情、意のうちどれを人生の「理想」とするかということを意味しているのであるが、漱石によれば、知を理想とする人は「物の関係を明め^{あきら}」(漱石 16: 88) ようとする人で、俗には哲学者、科学者などと呼ばれる。情を理想とする人は「物の関係を味はう」(漱石 16: 88) ことを目的とする人で、これは俗に(文学者を含んだ)芸術家と呼ばれる。また意を理想とする人は「物の関係を改造」(漱石 16: 88) しようとする人で、これは俗に軍人、政治家、百姓、車引き、豆腐屋などと称される。

ここでは文学者の理想が問題なのであるから、話の焦点はもちろん情を理想とする人にある。文学者(芸術家)は情(感情)を惹起することを目的・理想としているというこの「基礎」における考えは、先に見た『文学論』の——文学(芸術)には事実的要素Fに加えて感情的要素fが不可欠であるという——F+fの理論の延長線上にある。ただし両者の大きな違いは、『文学論』が文学作品を対象としているのに対して、「基礎」が文学者を対象としているということであり、後者において漱石は、文学者の理想は感情の惹起の仕方によって、更に四つの下位の理想へと分類されると論じている。その四種の文学的理想は、先に見た時間・空間内における物と我の分化、また我の知・情・意への更なる分化という発想に従って、——ごく簡潔に要約すれば——次のように説明されている。

- ① 美に対する理想。「物」(自然の風物)に基づいて情を惹起することを目指す。
- ② 真に対する理想。「知」を働かせ、特に人間関係の在り方を明らかにすることを通じて情を惹起することを目指す。
- ③ 善に対する理想。特に人間における愛や道義に関する「情」を描写することを通じて情を惹起することを目指す。

12) ここで注意しておきたいのは、これは漱石が神の存在を認めていたことを意味するものではないということである。ここで問題となっているのは、ただ我々が有している神という概念についてのみである。

- ④ 莊嚴に対する理想。特に人間における「意」（意志・生き方の理想）を描くことを通じて情を惹起することを目指す（漱石 16: 91-99）。

これに関する漱石の議論は上の様にすっきりした形を取っている訳ではないが、本稿の目的の為にはこうした大枠の理解で十分である。これら諸理想の詳細な理解よりもここで重要なのはむしろ、漱石がこれらの理想の実現には——技術だけでなく——作者の個性・人格が必要不可欠であると考えていたということである。換言すれば重要なのは、漱石が、作者の人格自体が上記の諸理想それぞれに関連した偉大さを有していなければ、それら理想の実現は不可能だと考えていたということである。漱石はこう述べている。

人間として尤も広く且つ高き理想を有した人で始めて他を感化する事が出来るのでありますから、文芸は単なる技術ではありません。人格のない作家の作物は……、感化力を及ぼす力も極めて薄弱であります。偉大なる人格を発揮する^な為めにある技術を使つて^{これ}之を他の頭上に浴せかけたとき、始めて文芸の功果は炳焉として末代迄も輝き渡るのであります。輝き渡るとは何も作家の名前が伝はるとか、世間からわいわい騒がれると云ふ意味で云ふのではありません。作家の偉大なる人格が、読者、観者もしくは聴者の心に浸み渡つて、^{その}其血となり肉となつて彼らの子々孫々迄伝はると云ふ意味であります。文芸に従事するのは此意味で後世に伝はらなくては、伝はる甲斐がないのであります。人名辞書に二行や三行か、^{だけ}れる事は伝はるのではない。自分が伝はるのではない。活版丈が伝はるのであります。（漱石 16: 116-117）

このように漱石にとっては、ある文学者が歴史に名を残すということそれ自体はその文学者の偉大さを意味しなかった。知名な文学賞だとか大衆の評判、作品の売れ行きだとかいった、世間一般に文学の価値とみなされているものも、彼にとっては真の文学的価値とは全く無関係であった（漱石 16: 511-513）。漱石にとって文学の真の価値とは、四種の文学的理想のいずれかあるいは幾つかを自己の血肉とした作者という一個の^な人格が、文章によるそれら理想の表現を通じて読者という別の一個の^な人格に消えることのない影響を与えるという点にこそ存していたのである¹³⁾。

漱石の考える四種の文学的理想を語る上で、作者の人格という要素はこのように極めて重要となるのであるが、それら理想を語る上において重要となる他の二点——ただし、互いに相関

13) ここで注意すべきは漱石が、文学者はそうした影響を与えることを第一の目的として創作活動を行うべきであると主張している訳ではないということである。漱石にとって、文学者とは根本的には他の誰か・他の何かの為に働くべきものではなく、ただ自分自身の表現欲求に従って「自己本位」（漱石 16: 595）にのみ働くべきものであった（この考えを漱石は、「芸術は自己の表現に始つて、自己の表現に終るもの」（漱石 16: 507）という表現に纏めている）。漱石にしてみれば、作者が「自己本位」でなければ理想を血肉とすることは出来ないし、読者に深い影響を与えることも出来ないのである。換言すれば、作者の「自己本位」の結果として初めて他者（読者）への深い影響＝真の文学的価値が生じ得るのである。

連する二点——もここで併せて指摘しておきたい。一つにはそれは、「四種の理想は、互に平等な権利を有」したそれぞれ「相冒すべからざる標準」（漱石 16: 101）であるということ、つまり、四種それぞれの文学的理想が同等の価値を有しているということである。また二つには、四種のうちどれか一つを文学的理想として掲げる作者・作品が他の文学的理想を欠くことは問題ないが、他の文学的理想を毀損してはならないということである。というのも、どの文学的理想にも同等の価値があるのであるから、例えば、①「美に対する理想」を実現しても、それによって②「真に対する理想」を打ち壊すようでは、文学的理想の実現具合は差し引きゼロということになってしまうのである（漱石 16: 99-103）。

と、本稿の主眼の一つである、文学者の営為を焦点とした漱石文学理論の基礎構造の説明は以上にして、これからは本稿における第二の眼目に移って行きたい。つまり、これまで説明してきたところを基にして、漱石の考える文学（者）と道德の関係について明らかにして行きたい。

3

漱石は「基礎」の発表から四年程後に行われた「文芸と道德」（1911）という講演において、当時の文壇における道德輕視を批判してこう論じている。

道德と文芸と云ふものは、決して切り離す事の出来ないものであります、両者は元来別物であつて各独立したものであると云ふ様な説も或る意味から云へば真理ではあるが、近來の日本の文士の如く根柢のある自信も思慮もなしに道德は文芸に不必要であるかの如く主張するのは甚だ世人を迷はせる盲者の盲論と云はなければならない、文芸の目的が徳義心を鼓吹するのを根本義にしてゐない事は論理上然るべき見解ではあるが徳義的の批判を許すべき事件が経となり緯となりて作物中に織り込まれるならば又其事件が徳義の平面に於て吾人に善惡邪正の刺戟を与へるならば、どうして両者を以て没交渉とする事が出来やう。（漱石 16: 476）¹⁴⁾

この引用において注意すべきは、漱石は決してすべての文学作品が必ず道德的要素を含まねばならないと主張している訳ではないということである。漱石が主張するのは、文学作品は必ずしも道德的関心と没交渉である必要性はないということ、もう少し具体的に言えば、文学が道德的素材を重要な形で扱うことは可能であるし、その場合には道德的素材の内容・取り扱いが作品の成否に影響を与えるということだけである。

「文芸と道德」において漱石は、道德に関わらない文学も存在するが、ここでは道德に関わる

14) この点に関しては、漱石 16: 484-485、および、漱石 25: 36-37も参照。

文学（＝道德的要素を含んだ文学）のみに対象を限定して話をすると前置きした上で（漱石 16: 464-465）、文学と道德の関係を「浪漫主義」と「自然主義」という二つの対立する文学的理想の観点から検討している。言い換えればそこで漱石は、これら両主義——どちらも道德（問題）だけではなく、より広い対象に関わっている——を道德的側面からのみ検討している。この二種の文学的理想は、漱石自身がそうと言明している訳ではないが、先に見た「基礎」における四種の文学的理想と比較すると、大枠で次の様な関係にあると言って良いであろう。つまり、〈浪漫主義〉は③「善に対する理想」と④「莊嚴に対する理想」を総合したものに相当し、一方の〈自然主義〉は②「真に対する理想」に相当すると言って良いであろう。が、こうした対応関係の正確性はここではさして重要ではない。ここで重要なのはむしろ、四種の文学的理想について先程述べたこと——すなわち、理想実現のための作者の人格の重要性、諸理想の価値の平等、一つの理想の過度の重視によって他の理想を毀損すべきではないこと——が、自然主義と浪漫主義という二種の文学的理想の対置にも基本的にはそのまま当て嵌まるということである。

それを頭に入れた上で、漱石の考える浪漫主義と自然主義の特徴を道德的観点に限定して見て行きたいが、まず浪漫主義の方から言えば、その特徴は、思考面・感情面において道德的に非凡な人間を描き出すことによって、読者の道德心に訴えかけるという点にある。漱石自身の言葉を用いれば、浪漫主義にあつては、「^{その}其中に出てくる人物の行為心術が我々より偉大であるとか、公明であるとか、或は感激性に富んであるとかの点に於て、読者が倫理的に向上遷善の刺激を受けるのが其特色になつて」いる（漱石 16: 474、傍点筆者）。

一方、自然主義の道德面での特徴については、漱石は次のように述べている。「自然主義の文学では〔浪漫主義とは異なり〕人間をさう伝説的英雄の末孫か何かであるやうに勿体をつけて有難さうには書かない、したがって読者も作者も倫理上の感激には乏しい、……普通の人間を^{ただ}只^た有の儘の姿に描くのであるから、道德に関する方面の行為も疵瑕交出するといふことは免^{あさま}かれない。たゞ斯う云ふ浅ましい所のあるのも人間本来の真相だと自分でも^{うなず}首肯^{うなず}き他にも合点させるのを特色としてゐる」（漱石 16: 474、傍点筆者）。

浪漫主義と自然主義に関するこうした対比的な引用だけからすると、漱石が浪漫主義は道德的であり、自然主義は（非道德的とまでは行かないにせよ）道德に無関心であると考えていたと理解されても不思議ではない。しか今し方述べたように、それぞれの理想は等価であるという「基礎」での原則はここにも妥当する。つまり、実のところ漱石は、自然主義にも積極的な道德性を認めており、浪漫主義には浪漫主義なりの道德性が、自然主義には自然主義なりの道德性が存するというのである。では自然主義なりの道德性とはなにかということであるが、実はそれは今の引用中に示唆されている。漱石によれば自然主義における道德性は、人間を浪漫主義のように非現実的・理想的には描かず「普通の人間を只^{ただ}有の儘の姿に描く」ところ、つまり人間の在り方を何らの誇張もなしに描写する正直さに存している。自然主義は「有の儘の本

当を有の儘に書く正直といふ美德」(漱石 16: 480)を有しているというのである。

この自然主義の道德性に関してここで一つ注意・確認しておきたいのは、漱石が当時の日本文学界の一大潮流となっていた自然主義文学(者)を批判しているということである。これまで見てきたように、漱石によれば文学的理想の間に優劣はなく、自然主義は浪漫主義に劣らぬ立派な文学的理想の一つであり、しかも積極的な道德性も備えている。そう主張するにもかかわらず、なぜ彼は当時の自然主義文学を批判するのであろうか。漱石は二つの講演(「基礎」および「文芸と道德」)でそれぞれ異なる理由を挙げているが、その一つに従えばこういうことである。漱石によれば——先に見たように——特定の文学的理想を偏重するあまりに他の文学的理想を毀損してしまうことは文学的瑕疵へと繋がるのであるが、当時の自然主義文学はこうした弊に陥っているというのである。こうした理由から漱石は、自然主義の世界的代表者たるゾラ、モーパッサン、イブセンの一部作品を失敗作と断じている。それらの作品は自然主義の理想を過度に尊重し人間の平凡さ・俗悪さを露悪的に描出することで他の理想を打ち壊してしまっており、それが読者に不快の念を生じさせるというのである(漱石 16: 103-116)。

漱石が——自然主義を立派な文学的理想と認めながらも——当時の自然主義文学を批判するもう一つの理由はもっとシンプルなものである。漱石のこちらの論によれば、世間に自然主義的と呼ばれる作品が文学的(あるいは道德的)に不味いものとなっているとすれば、それはその作品が真の意味で自然主義的ではないからである。換言すればそれは、その作品が正直さを特色・美德とする自然主義的理想を表現するのに失敗した「出来損な [い]」(漱石 16: 480)だからである(漱石 25: 39)。この観点から漱石は例えば、日本の自然主義文学者の代表格とされる田山花袋や国木田独歩の作品の多くは、作為の跡の露骨な不自然な失敗作であると論じている。(漱石 16: 254-256; 漱石 25: 268-272)。

このように、漱石においては真の自然主義と当時流行の自然主義文学とは異なるものを意味している。それを把握した上で、自然主義、浪漫主義の道德性について漱石がどのように考えていたのかより詳しく見て行きたい。

漱石は浪漫主義に存する道德性を「浪漫的道德」もしくは「ロマンチックの道德」と呼び、明治維新以前に尊重された道德であるとしている(漱石 16: 481)。一方自然主義に存する道德性は「自然主義的道德」もしくは「ナチュラリスチックの道德」と呼び、明治維新以降に重んじられている道德であるとしている(漱石 16: 481)。漱石は二つの道德をこのように歴史的観点から維新以前のそれ・維新以降のそれと対照的に解する一方、両道德の特徴もやはり対比的なものとして描き出している。その対比的な描出には、主に次の二つの対比軸が存在していると言って良いであろう。一つ目は既に見た対比軸、つまり浪漫的道德は非現実的(英雄的・感性的・非凡)な理想を掲げるものであり、自然主義的道德は現実的(俗的・凡庸)な物事を真率に描出するものであるという対比軸である。また二つ目は、浪漫的道德は利他性(社会・他者への奉仕)を重視するものであり、自然主義的道德は個人(自己)の在り方を重視するもの

であるという対比軸である。

ここで取り上げるべきは当然まだ説明していないこの後者の対比軸の方であるが、その観点からすると浪漫的道徳の根幹は、「我が利益の凡てを犠牲に供して他の為に行動せねば不徳義であると主張するやうなアルトルイスチック一方の見解」（漱石 16: 482）にある。具体的に言えば、臣は君の為に子は親の為に妻は夫の為になどといったように、当時の社会制度における弱者が強者に対して自己犠牲を払わねばならないという考え、個人に対して社会（における権威）を優先すべきであるという考えが浪漫的道徳の基盤となっている（漱石 16: 482-483）。一方の自然主義的道徳は、それとは真逆に現実的で俗的な「個人を本位として組み立てられた」（漱石 16: 482）道徳であり、社会への奉仕よりも個人の自由意志と自由な決断を重んずるべきであるという考えに基づいている。

こうした利他主義的／個人主義的観点から両道徳を比較して、漱石は次のように述べている。

「ロマンチックの道徳〔浪漫的道徳〕は大体に於て過ぎ去つたものである」貴方^{あなたがた}が何故かと詰問なさるならば人間の智識がそれだけ進んだからと只一言答へる丈である……元^{まこと}は真しやかに見えたものが、今はどう考へても真とは見えない、嘘としか思はれないからである、従つて実在の権威を失つて仕舞ふからである、単に実在の権威を失ふのみならず、実行の権利すら失つてしまうのである、人間の智識が発達すれば昔のやうにロマンチックな道徳を人に強ひても、人は誰も躬行するものではない、出来ない相談だといふ事がよく分つて来るからである。是^{これだけ}丈でもロマンチックの道徳は已に廃れたと云はなければならない……夫^{それ}や是^{これ}の影響から吾々は日に月に個人主義の立場からして世の中を見渡すやうになつてゐる、従つて吾々の道徳も自然個人を本位として組み立てられるやうになつてゐる……是が現代日本の大勢だとすればロマンチックの道徳換言すれば我が利益の凡てを犠牲に供して他の為に行動せねば不徳義であると主張するやうなアルトルイスチック一方の見解は^ど何うしても空疎になつて来なければならない……冷静な科学的観察が進んで其偽りに気が付くと同時に、〔浪漫的道徳が〕権威ある道徳律として存在出来なくなるのは已^{やむ}を得ない上に、社会組織が漸々変化して余儀なく個人主義が発展の歩武を進めてくるならば猶更打撃を蒙るのは明かであります。（漱石 16: 481-483）

端的に言つてつまり、浪漫的＝社会奉仕的道徳とは旧時代の廃れた道徳であり、自然主義的＝個人主義的道徳こそが現在のそしてこれからの道徳であるというのであるが、こうした漱石の道徳観はそのまま漱石の文学観に直結している。というのも漱石にとって実社会で現実に行われている道徳に反対した文学は「死文芸としてより外に存在は出来ないもの」（漱石 16: 485）、「枯れて仕舞はなければならない〔もの〕」（漱石 16: 485）だからである。つまり、（道徳的要素を扱う）これからの文学が「死文芸」とならない為には、実社会で自然主義的道徳が行われて

いる以上、それに沿ったものでなければならないというのが漱石の主張なのである。

こう書くと、漱石が恰も、日本社会はこれから浪漫的道德は一切捨てて自然主義的道德だけで遣って行けばよい、文学もまた（道德問題を扱う際には）自然主義的道德一本で遣って行けばよいと主張しているようにも思われるであろう。しかし、それは漱石の趣意ではない。先に見た通り、「基礎」における四種の文学的理想に関してと同様、漱石は自然主義と浪漫主義を対等な理想とみなしているのである。ただしこれから見るように、これら両主義の対等関係は、四種の文学的理想の等価関係とは異なり些か込み入ったものになっているのではあるが。

4

これまで見て来たように漱石は、明治以降の（道德問題を扱う）文学は、明治以降の実社会で行われている自然主義的道德に即したもの、つまり自然主義的とならなければならないと主張する。しかしこれは、自然主義（的道德）が完全に望ましいものであるということの意味している訳でも、浪漫主義（的道德）が全く無用であるということの意味している訳でもない。漱石は実のところ、社会が（1）俗的・現実的＝非理想的かつ（2）個人主義的な自然主義的道德一本で遣って行くことにはそれはそれで問題があると考えていたのである。

まず（1）の点に関して言うと、社会が自然主義的道德一辺倒となれば社会に「理想」が欠如してしまうことになるが、漱石にとってそれは大きな問題であった。彼は、「どんな社会でも理想なしに生存する社会は想像し得られないと迄信じてい」（漱石 16: 483）たのである。また（2）の点に関しては、漱石は次のように述べている。「自然主義の道德と云ふものは、人間の自由を重んじ過ぎて好きな真似をさせるという虞^{おそれ}がある、本来が自己本位であるから、個人の行動が放縦不羈になればなる程、個人としては自由の悦楽を味はひ得る満足があると共に、社会の一人としてはいつも不安の眼を睜^{みは}つて他を眺めなければならなくなる、或る時は恐ろしくなる、其結果一部の反動としては、浪漫的^{その}の道德^{これ}が是から起らなければならないのであります」（漱石 16: 483-484、傍点筆者）。

このように漱石の見通しによれば、社会が（俗的・現実的な個人に立脚した）自然主義的道德一辺倒となることで理想の欠如や社会の不安定といった弊害が生まれ、その弊害を補うべく（理想的かつ社会奉仕的な）浪漫的道德が一部また息を吹き返すことになるだろうというのである。しかしこれは、旧時代の浪漫的道德がそのままの形で再興することを意味しない。漱石によれば歴史は全く同じような形では「決して繰り返されない」（漱石 16: 485）¹⁵⁾のであり、自然主義一辺倒への反動としてこれから生じてくる浪漫的道德は、江戸時代の浪漫的道德とは異なる、「我々現在生活の陥穴を補ふ新らしい意義を帯びた」（漱石 16: 485）別種の浪漫的道德だと

15) 漱石 25: 40 も参照。

いうのである。

こうした新時代の浪漫的道徳の具体的な形について漱石は殆ど説明してくれないが、一つだけ確かなのは、新時代の浪漫的道徳は往時のそれのように非現実的な理想を掲げるものではなく、「実現の出来る程度の」（漱石 16: 484）現実的な理想を立てるものであるということである。つまり、新時代の浪漫的道徳は自然主義的（＝俗的・現実的）道徳に真っ向から対立するものではなく、自然主義的道徳と共存・調和可能なものなのである。どころかこれから見るように、両者の共存・調和は理想とさえみなされているのである。

こうした両道徳の共存・調和という考えについてまず指摘しておくべきは、「文芸と道徳」における以上のような議論において漱石が、新時代の浪漫的道徳を——先の引用にもあるように——「^一部分的の反動」、あるいは「小波瀾」（漱石 16: 484, 傍点筆者）、「小反動」（漱石 16: 485, 傍点筆者）などと呼んでいるということである。こうした呼称のみからすると、漱石がこれからの時代の主潮はやはり自然主義的道徳であり、新時代の浪漫的道徳はそれに対して僅かな調整的影響を与えるだけであると考えていたように思われても不思議ではないし、「文芸と道徳」のみを読む限りでは実際そうした読みが正しいようにも思われる。しかし「教育と文芸」という同時期（正確には一月前）に行われた講演録の記述を読めば、漱石が「小波瀾」や「小反動」という言葉が惹起するよりも遥かに大きな価値を新時代の浪漫的道徳に認めていたことが分かる。

「教育と文芸」において漱石は、現代社会における自然主義一辺倒の道徳面での弊害を、理想の欠如・向上心の欠如という観点からこのように説明している。

自然主義は遠慮無く事実^{そのまま}其儘を人の前に暴露し、又は描き出す為め種々なる〔道徳的〕欠点を生ずるに至りましたが、之を救ふは過去のローマン主義〔浪漫主義〕を復興するにあらずして、新ローマン主義〔新浪漫主義〕ともいふべきものを興すにあらうかと思ふ。……／……新ローマン主義とも云ふべきものは、自然主義対ローマン主義の最後に生ずる筈である、新ローマン主義と云ふとも決して、昔のローマン主義に返つたのでは無い、全く別物なのであります。／即ち新ローマン主義は、昔時のローマン主義の様に空想に近い理想を立てずに、程度の低い実際に近い達成し得えらるゝ目的を立てゝ、やつて行くのである。社会は常に、〔自然主義とローマン主義の〕二元である。……甲の場合には自然主義六分ローマン主義四分と云ふ様に時代及び場所の要求に伴ふて、両者の完全なる調和を保つ所に、新ローマン主義を認め、将来は斯うなる事であらうと思ふ。／昔の感激的の教育と、当時の情緒的なローマン主義の文芸と今の科学上の真を重んずる教育主義と、空想的ならざる自然主義の文芸と、相連つて両者の変遷及び関係が明瞭になるのであります、斯くして人心に向上の念がある以上、永久にローマン主義の存続を認むると共に、総ての真に価値を発見する自然主義も亦^{また}充分なる生命を存して、此^{この}二者の調和が今後の重なる傾向となるべきものと思ふのであります。（漱石 25: 40-41, 傍点筆者）

こうした説明から明らかなように、漱石は実のところ——あるいは少なくとも「教育と文芸」においては——新時代における浪漫主義（的道德）の復権を、自然主義（的道德）という大潮流に対する軽微な「小波瀾」，「小反動」と考えていた訳ではない。維新以前の社会に見られた様な浪漫的道德が再び自然主義的道德よりも優位に立つようになることはないであろうし、またそうあってはならない。しかし、自然主義一辺倒となった世の中であって浪漫主義は実現可能性という特徴を帯びた新しい形で復興するであろうし、またせねばならない。そうして、社会においてのみならず（道德を扱う）文学においても、自然主義的道德と浪漫的道德は等しく尊重されるべきものとして調和状態へともたらされねばならない——というのが漱石の主張である。

今し方の引用にもあるように、漱石はこのような自然主義的道德と（新時代の）浪漫的道德両者の理想的な調和を目的とする態度を「新ローマン（浪漫）主義」と名付けているが、こうした意味での「新浪漫主義」こそ¹⁶⁾、道德問題を（主として）扱う文学のあるべき形についての漱石の結論であるとみなして良いであろう。

結語

以上、意識とは何かという漱石文学理論の根本問題から発して、道德的要素を主題とした文学の理想的なあり方についての漱石の中心見解へと至った。その流れに従って漱石の論をごく大雑把に纏めればこうである。

なぜだか知らないがとにかくまず意識がある。意識は流れている。換言すれば、無数の印象・知覚が意識の中を連々と流れている。こうして連綿と流れる諸種の印象・知覚の内容と順序を、人はある程度自由に選択することができる。この選択可能性から（どのような知覚・印象を選び、どのようにそれらを並べようかという）理想が生まれる。意識＝人生の理想の中には感情の惹起を主目的とする文学者の理想というものがあるが、それは更に四種の等価な文学的理想に分類することができる。また、道德的主题を扱う文学のみに限定して言うと、その四種の文学的理想の内の二種を纏めたものに相当する浪漫主義と、その内の一種に相当する自然主義に分類できる。非凡な高い理想と社会奉仕性・利他性を特徴とする浪漫主義は維新以前の主流であり、現実的平凡さと個人主義とを特徴とする自然主義は維新以降の主潮であるが、これからはそれら両者を調和させた新浪漫主義が興ることであろうし、そうでなければならない。

こうした本稿の議論は一義的には、漱石の文学理論（美学）とその理論が有する道德観の一層の解明に向けられたものであるが、それが漱石文学（作品）の理解にとっても一つの意義を持ち得るものであるということを最後に付言しておきたい。

16) 漱石は「新浪漫主義」およびそれに類する言葉を常にこの意味で使っていた訳ではない（『漱石全集』の注解〔漱石 14: 490〕参照）。したがって、その点には注意が必要である。

ここでは道德問題を主要要素とした文学に限定して議論を進めてきたが、この議論はかなりの程度漱石文学全般に当て嵌まる。というのも、——人生や社会の真相には無関心に、ただ「読者の頭に、美しい感じ」（漱石 25: 211）を残すことのみを目指した「俳句的な小説」（漱石 25: 211）である『草枕』の様な明らかな例外はあるにせよ——『坊ちゃん』、『それから』、『門』、『行人』、『ころも』、『明暗』など漱石文学を代表する作品の大多数は（多く恋愛問題に纏わる）道德的要素を主題としたものなのである。しかもそれらは正に「新浪漫主義的」に、理想のかつ社会優先的な浪漫的道德と俗のかつ個人主義的な自然主義的道德の間の葛藤を描いているのである（二つの道德間での「葛藤」を一つの作品中に表現することは、両道德の「調和」的表現と呼んでも良いであろう）。

先に述べたように、漱石にとって、作家の人格と文学作品・文学的価値とは不離の関係にあった。彼にとって、文学作品の真の価値は文学賞や世間の評判にではなく、作者の人格から読者の人格への深い影響にこそ存するものであった。自然主義や浪漫主義などといった諸種の文学的理想の実現は、それらの理想に関連する作者の人格の偉大さに基づいて初めて可能となるものであった。つまり、主要な漱石作品の大半が「新浪漫主義的」であるとするならば、それは漱石自身が「新浪漫主義」をその人格中に血肉としていたということを意味している。

漱石自身の言葉によれば、明治維新の前年に生まれた彼は、浪漫的道德と自然主義的道德の両方から「中途半端の教育を受けた海陸両棲動物のやうな怪しげなもの」（漱石 16: 471）であった。つまり漱石は、その実生活において旧時の浪漫的道德と現代の自然主義的道德との間の葛藤の中に生きることを余儀なくされていたのである。であればこそ、同時にまた、漱石が文学作品は作者の人格の上にこそ成立すべきものと考えていればこそ、——『草枕』のような軽みを帯びた俳句的文学作品の一方で——「命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で」（漱石 22: 606）産み出された漱石の作品の多くは、（葛藤の中に）両道德の調和を目指す「新浪漫主義的」な形を取ることとなったと言えるであろう。

以上で本稿の議論は尽きているが、ここで論を終えれば、本稿は作家漱石の創作における根本態度を主題としたものという印象を残す恐れもないではないだろうから、最後に改めて次のことを強調しておきたい。——本稿の主眼は作家としての漱石の根本態度ではなく、文学理論家（あるいは美学者）としての漱石の文学理解・道德理解である。

参考文献

伊藤節子、「初期漱石における『科学』の様相：『文学論ノート』をめぐって」、『三田國文』57, 2013年, 48-62頁。

小倉脩三、『漱石の文学理論』, 翰林書房, 2019年。

亀井俊介、『英文学者 夏目漱石』, 松柏社, 2011年。

加茂章, 「決定論を超える漱石: スペンサー・ジェームス受容の背後にあるもの」, 『日本文学』 33 (3), 1984年, 1-12頁。

小宮豊隆, 『漱石の芸術』, 岩波書店, 1949年。

佐藤裕子, 『漱石のセオリー——『文学論』解説』, おうふう, 2005年。

島田厚, 「漱石の思想」, 『日本文学研究資料叢書 夏目漱石 I』, 有精堂, 1982年, 108-125頁。

坪内逍遙, 『小説神髓』, 岩波書店, 2010年。

夏目金之助 (夏目漱石), 『漱石全集』, 岩波書店, 1993-2004年。

Morgan, C. Lloyd, *An Introduction to Comparative Psychology*, Walter Scott Publishing, 1903.